Daily

“自分のできること” で中町を盛り上げたい

道行く人に大きな声と笑顔で話しかけるレストラン御幸の２代目店長、村上陽心さんは、青年会議所や消防団のメンバー、横町十文字まちそだて会の理事長などさまざまな地域の活動をされています。旧松の湯と同じ中町に構えるレストラン御幸やまちづくりについて、そしてご自身の夢を伺いました。

「献上菓子を作っていた松葉堂まつむらのお菓子は…。火の見やぐらは大正 13 年建設で、市内で 2 番目に古く…。」黒石の歴史をいきいきと語る村上さん。昨年、一般の参加者を募り、鳴海酒造や高橋家住宅、ボッコ靴工房などの建物を巡るまち歩きツアー（※）を行いました。「黒石の素材をただ見てもらうか、案内人をつけるかで全然違います。黒石の良いところはいくらでも話せますよ。」と、ガイドを務めた村上さんは今後もツアーを企画し、さまざまな人と一緒にまちを歩きたいと話してくれました。

幼少期の頃から人と触れ合うことが好きな村上さんは、モデルや俳優を目指していた時期がありました。「いろんな人生を演じられるダンディーな俳優に憧れていましたが、父親が病気になった時、お店を継ぐことを決めました。」憧れの世界を夢見る一方で、小学校の卒業アルバムには“将来の夢はレストラン御幸を継ぐこと”と、しっかり書き記していました。地元の黒石でスターになろうと決意されたとのこと。

レストラン御幸は昭和 46 年創業。質屋や布団屋を営んでいた時期もありましたが、その後、父親の信吾さんが小さな飲食店を始めます。「最初は飲み物だけだったのが、お客さんからの要望でエビフライやハンバーグといった洋食を始め、次に和食やその他のメニューも増やしてい

村上陽心（むらかみ・あききよ）さん／レストラン御幸２代目店長

きました。今度は配達してほしいということで…。」お客様のリクエストで事業が拡大し、現在は仕出し屋とレストランの両方を営んでいます。

レストランのメニューには郷土料理や地元の食材を使った料理が並びます。「郷土料理には一つ一つストーリーがあって、料理を食べながらそれも味わってほしいです。なぜ、郷土料理をここで提供するのか、そこにこだわりたいです。」と村上さん。例えば、津軽の七草がゆ「けの汁」は、その由来に習ってお正月の期間だけ登場します。「郷土料理は、黒石の良いところを知ってもらうためにあると思っています。まち歩きはまちの再発見につながります。郷土料理も再認識ですよね。たまに帰ってきて食べる料理はおふくろの味だけど、外から来た人が黒石の文化に触れて食べたら郷土料理になると思います。」

地元の人にも外から来る人にも、黒石の良さを見つけてほしい…。その思いから、さまざまな活動を進めている村上さんは、「中町の通りを食で盛り上げることが自分の使命だと思っています。食を極めたいです。」と、今後の夢を語ってくださいました。できることを一歩ずつ。そう語る村上さんはその名のとおり、太陽のようなエネルギーで今日も中町を照らしています。

（※）まち歩きツアー：黒石の歴史や文化が感じられる建物を市が「小さなまちかど博物館」に認定し、横町十文字まちそだて会が「博物館」を巡るツアーを開催しました。今後のツアーの予定は、下記 HP をご覧ください。（http://kuroishi-machisodate.com/touro.html）

■「旧松の湯再生事業」のお知らせ

施設名の一般公募をスタートします。
○公募開始時期：８月中旬予定
○詳細：黒石市ＨＰよりご確認ください
（http://www.city.kuroishi.aomori.jp/）
○問い合わせ先：黒石市都市建築課

■松の湯レター創刊号のお詫び

３頁「Voice」高橋幸江さんのお名前の表記に間違いがありましたこと、お詫び申し上げます。正しい表記は「髙橋幸江（たかはし・ゆきえ）さん」です。

編集後記

今回の「News」では、16 年間黒石市の先陣を切ってこられた鳴海広道前市長にお話を伺う機会をいただきました。質問の一つ一つに力強く丁寧に答えてくださる姿が印象に残っています。インタビュー中、津軽弁の「どさ？（どこ行くの）」「ゆさ！（お風呂だよ）」の話題になり、インタビュアーとして同席されていた北原先生が一言、「いつの日か、『ゆさ』が『松の湯に行ってくるよ！』という意味で使われるようになったら嬉しいね。」はい、…そんな日を夢見て。

多くの皆様のおかげで「松の湯レター第２号」を刊行することができたこと、感謝申し上げます。「どさ？」「ゆさ！」（津田）

松の湯レター 第２号
発行日：平成 26 年７月 21 日
発行：NPO まちづくりデザインサポート / 編集・執筆：津田純佳 / 表紙デザイン：小田洋介 / 後援：黒石市、黒石市教育委員会 /
問い合わせ先：NPO まちづくりデザインサポート　東京都世田谷区代沢２−22−7　info@urbandesignsupport.com

松の湯レター第２号

No.2 / 2014年７月

News：良いものは残し、新しいものを創っていく
これからも美しい黒石へ
Voice：津軽弁を学んだ松の湯（後編）
Daily：“自分のできること”で中町を盛り上げたい

MATSU NO YOU

News 良いものは残し、新しいものを創っていく これからも美しい黒石へ

平成 26 年 7 月 17 日、市のリーダーシップを 16 年間取り続けてきた鳴海市長が勇退されました。これまでのまちづくりや旧松の湯を取得した当時の思いを伺うため、弘前大学教授の北原啓司先生と市長室を訪問しました。

まちの将来にとって大事な場所

旧松の湯が銭湯だった頃の印象はいかがですか？（インタビュアー：北原啓司先生　※以下、同様）

大きな松が印象的で、地域では有名でした。この 10 年で思いがより深くなったと感じています。

旧松の湯を取得された当時は、市の財政再建のまっただ中で、思いはあっても取得するのはなかなか大変だったのではないですか？

確かに一番苦しい時でしたが、黒石の将来を考えた時、旧松の湯の取得がまちの将来につながると思ったのです。幸いなことに、所有者の協力が得られ、スムーズに話が進みました。あの時は政治的に大事な判断であったと思っています。

それは、旧松の湯が一戸の建物というだけではなく、取得することで今後のまちづくりにつながっていくという市長の思いもあったのですか？

伝統的建造物群保存地区の範囲は広くないですが、旧松の湯があることで中町に楽しむ場所が増え、黒石市に来る人にもっとまちなかを歩いてもらいたいという思いがあります。今後は中町に限らず周辺の地域のまちづくりも盛り上がっていくと良いと思っています。

旧松の湯のある場所は前町や横町にも続き、まち全体に波及効果が現れていく場所ですね。

市庁内全体で取り組んでいく

取得した頃は、北原先生にまちづくりのアドバイスをいただいたり、こみせを中心としたまちづくりを進める検討をしていた時期でした。まちなかを盛り上げる機運がありましたが、財政的には厳しく、なかなか勢い良くは進みませんでした。

最初の頃は、伝健地区ということで文化課だけが担当していましたが、今は全課から約 80 名もの職員が職員研修会（※松の湯再生事業やまちなかに関する事業の研修会（3 頁参照））に参加し、情報を共有しています。これは、庁内全体で取り組むという意識の現れだと思っています。

これから、金平成園の改修や景観計画の策定など、計画がさらに進んでいきますね。このタイミングを逃さないようにしてほしいです。さて、市長を後継の方に譲られますが、今後、一黒石市民として黒石のどのような姿を見ていきたいですか？

黒石市長 鳴海広道（なるみ・ひろみち）氏
（取材日：平成 26 年 6 月 16 日）

これからも美しい黒石であってほしい

今の時代、新しいものを求める人もいます。昔の良いものを残して次の世代にバトンタッチしようとする人もいます。東京は人口がどんどん増えて新しいまちができますが、地方は東京には無い文化や歴史があります。黒石の良さは、そこだと思います。残すものは残し、手を加えながら新しいものを創っていくことが、これからの黒石市の将来につながっていくと思います。

黒石市は、県南と津軽を結ぶ接点として、青森県のちょうど真ん中に位置しています。黒石市は交通の要の場所にあります。こみせを中心とした黒石ならではのまちづくりを進めることで、さまざまな地域の点と線を結び、それが黒石の将来にもつながっていくものと思っています。後継の皆さんに何かをお願いするというよりも、マラソンで例えると今は折り返し地点だと思います。まだゴールではありません。

１つの目標に向かってここまで来て、これからは、積み重ねてきた歴史や通ってきた道をより良くしていくということですね。なるほど。

私は若い頃、飛騨高山の町並みを見て、その美しさに感動しました。自分の生まれ故郷をそのような美しいまちにしたいという思いをずっと持ってきました。来年は景観への取り組みとして、こみせ通りの電線類の地中化に着工します。10 年後、50 年後、そしてその後も、絵になる美しい町並みであってほしいと思っています。

次の世代にも、市長の思いや黒石市民のプライドが持続していくことが大切になりますね。住みながら育てていくまちとして、美しさを保ってほしいです。ありがとうございました。

（※）職員研修会：市のまちづくりについて庁内の横の連携を強めるために研修会を開催。3 回目の今回は市職員のほか市議会議員なども含め約 80 人が参加し、「まちづくりの協働はできているか」について、北原啓司教授による講義や新しく設置された「まちそだて推進係」の事業紹介、松の湯やこみせに関する事業などの説明が行われました。

Voice 「津軽弁を学んだ松の湯」（後編）―髙橋家１４代当主　髙橋幸江さん

私が東京から嫁いで来て、初めて津軽弁を聞いたのは松の湯だったのよ。最初は、皆笑っていても何が面白いのか分からなかった。地元のおばあちゃん達に「見慣れない顔だけどどこのあね様？どこのかっちゃ？髙橋家なの！あの難しい家に東京から来たの？へば、いつまで耐えられるべ、いつ出て行くべ」って珍しがられたわ。

私が子どもと松の湯でコーヒー牛乳をラッパ飲みして家に帰ったら、「髙橋家の嫁が何をしているの！」ってうんと父母に叱られた。家に帰って来てから飲みなさいと。それだけ当時は閉鎖的だったわ。20 年間はよそ者だったけど、40 年経った今は地域のことやお見合いのことまで、何でも相談される側になっているのよ。

松の湯が銭湯だった頃、小さな子どもを連れた新米のお母さんがお風呂に来たら、ベテランのお母さん達が面倒を見てくれたのよ。布おしめは男は上を厚く、女は下を厚くとか、いろいろ教えてくれるの。子育ては地域の人に教えてもらったわ。

新しい松の湯も常に誰かがいて、「あの人に聞いて来よう、あそこに行けば解決する」というコミュニケーションの拠点になってほしい。

髙橋幸江さん
（たかはし・ゆきえ）
髙橋家 14 代当主。